

[024] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10245>

出版情報：語文研究. 24, 1967-10-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

◇ 学 会 叢 報

▼講義題目 昭和42年度第一学期

(大学院)	国語学特研(中世古文書の研究)	福田 教授
(大学院学部)	全 演習(万葉集卷十九)	全
(全)	全 講義(国語学概説)	全
(全)	全 演習(法華修法一百座聞書抄)	春日助教授
(全)	全 特講(漢字音と漢語の研究)	全
(学部)	全 講義(国語史)	全
(大学院)	国文学特研(近世文学観の諸問題)	中村 教授
(全)	全 演習(風俗文選)	全
(大学院学部)	全 講義(近世小説史)	全
(学部)	全 講読(武道伝来記)	全
(大学院)	全 演習(伝記研究の諸問題)	今井助教授
(大学院学部)	全 演習(馬内侍集)	全
(学部)	全 特講(源氏物語論)	全
(全)	全 特講(近代作家論)	重松助教授
▼受贈図書 昭和42年2月18日		福田 良輔
神奈川県方言辞典		"
栃木県安蘇郡野上村語彙		"
岩手方言研究第一・三集		"
方言の歴史		"
越佐方言集		"
気仙方言誌		"
平安遺文第一・二卷		"

廣韻反切索引

上代東国方言の研究	長崎県史編集室
渡辺庫輔氏所蔵文書目録	"
やまなみ	"
道工彦文家集	大友 芳雄
柳田清雄遺芳	道工彦文顕彰会
芭蕉の芸術	恵良 宏
浄瑠璃評判記集成下	小林 祐作
漢字談義	演劇研究会
花影抄	大修館書店
天地交驪	国立国会図書館
月暈	"
雲海	"
海峽	"
作文指導の出版	"
近代日本の文芸思潮	"
言語にとって美とはなにかI・II	"
日本の表現の言語科学	九大祭実行委員会
萬葉集成立攷	佐久間 鼎
国文研究古野新墾	関東短期大学
斯道文庫論集	塚田 六郎
国立国語研究所年報	斯道 文庫
	国立国語研究所

▼受贈雑誌

昭和42年1月～6月（その三）

（五三頁よりつづく）法政大学文学部紀要12、国文学研究（早稲田大学国文学会）35、連歌俳諧研究29、32、有明工業高専紀要2、三重県立大学研究年報5巻2、史苑（立教大学史学会）27巻3、音声学会会報124、立命館文学255、257、古代文学会報（北海道大学古代文学会）2、国文目白（日本女子大学）6、実践女子大学文学部紀要10、語文（日本大学）26、愛媛大学紀要12、国文学（関西大学）41、華7、9、コロナ文学2、文庫16、美夫君志10、能楽思潮38、39、国語と教育（大阪学芸大学）2、城34、北1、北九州詩人と作家3、ことばの宇宙3、ぐんしよ1、2、4、19、21、23、

▼受贈抜刷

源氏物語の恋愛と無常（愛媛大学紀要12） 仲田 庸幸
海音の浄瑠璃執筆態度―時代物の場合―（大阪学芸大学紀要15） 横山 正
宝永時代（18C初頭）土佐言語管見（高知大学教育学部研究報告19） 吉野 忠

後記

雨滴を見ないこと二か月、砂ぼこりにまみれ、黄色くしなびた構内の樹々を見ると、ふかまる秋にも、今年是不吉な気配をおぼえる。その中で、来る十月九・十両日には、われわれ研究室の主催下に、和歌文学会・万葉学会の合同大会が開かれる。参加者は二〇〇名を越えそうである。本号は、そういうあわただしさの中で、まとめられた。従来に比し、やや出来上りが早かったのは、印刷技術の為もあるが、主としてやはり会員諸兄の間に積極的な投稿の気運がたかまってきたためと思われる。御同慶にたえない。

内容はごらんの通り、論文四篇と紹介二篇。春日助教授の論文は、国語国文に発表された前稿の続篇で、もともととは違っていた「昔」と「今は昔」の二語が、しだいに「昔」の一語に統一されていった経緯を明らかにされたもの。藤井氏の論文は、日本書記の音仮名「支」が、朝鮮系の字音による仮名表記であることを具体的に例証し、紫藤氏は武蔵の五輪書と関係のふかい「独行道」について、資料的な精査を加えた上で、興味ふかい新見を加えられた。海老井氏は「六の宮の姫君」が、芥川独自の作品としては、問題の残る作品であり、彼の作風における転機がそこに認められると論じている。それぞれに、具体的な問題提起の意欲を秘めたものであることは、お分りいただいけよう。

研究室も四月以来、様子がかなり変った。助手の原口君が北九州大へ栄転の後へ金原理君（博士課程中退）が代った。又、修士課程の顔ぶれが大幅に変わり、学部同様に女子の比重がやや加わった。海老井君は昨年にひきつづいて助手として勤めて貰っている。各位にもよろしく願いたい。

（担当、福田・今井）

介伝記論考」)

○「芥川君は腹下しのあとで痛々しい程、瘦せ衰え、そして非常に神
経質に見えた。……芥川君は三年間程私が全く小説を書かなかつ
た時代の事を切りに聞きたがつた。そして自身そういう時機に来て
いるらしい口吻で、自分は小説など書ける人間ではないのだ、とい
うような事を云っていた。」(志賀直哉「沓掛にて」芥川君のこと
」(昭・2))

12 「死後」(大正十四年九月「改造」)

▼受贈雑誌 昭和42年1月～6月(その一)

国語と国文学1～7月、国語国文2～5月、国文学解釈と鑑賞
1～7月、国文学解釈と教材の研究1～7月、文学1～6月、
解釈12～5月、国学院雑誌10～4月、学苑12～6月、文献ジ
ャナル12・5・6月、八雲4月、白路12～3・5・6月、日米
フォーラム12～6月、肇国12～6月、成城文芸45・46、名古屋
大学国語国文学19、学習院大学国語国文学会誌10、人文論究
(関西学院大学人文学会)17巻1～3号、言語と文芸49～51、文
学語学42～44、一橋論叢12～6月、近代文学研究(東洋大学近
代文学研究会)13、文学会論集(甲南大学)32、甲南国文14、
山口大学文学会誌17巻2、国語国文学(東京学芸大学)1、女
子大文学(大阪女子大学)18、女子大國文(京都女子大学)43
45、演劇学(早稲田大学演劇学会)7、文化(東北大学文学
部)30巻3・4号、朝鮮学術通報3巻5～4巻2、中世文芸(

広島大学中世文芸研究会)34・37、国文鶴見(鶴見女子大学日
本文学会)1・2、金沢大学教養部論集3、演劇研究(早稲田
大学演劇博物館)2、国語国文論集(静岡女子短期大学)1、
国立国語研究所年報16、成蹊大学文学部紀要1・2、国語学研
究(東北大学文学部)6、王朝文学(東洋大学王朝文学研究会
)13、日本文学誌要(法政大学)12～17、実践文学29・30、日
本学術会議月報12～2月、文芸と思想(福岡女子大学文学部)
29・30、愛文(愛媛大学文学部)5、相模女子大学紀要25
27、国語研究(国学院大学)23方言学会会報16～19、国文(お
茶の水女子大学)26、人文科学紀要(東京大学教養学部)39、
国語研究室(東京大学国語研究室)5、愛媛国文研究16、学大
国文(大阪学芸大学)10、語文(日本大学国文学会)25・26、
専修国文1、金沢大学教育学部紀要15、言語文化(一橋大学語
学研究室)3、大阪経大論集52～55、文林(松蔭女子学院大学
国文学研究室)1、近世文芸橋(広島近世文芸研究会)11、人
文研究17巻10～18巻3、萬葉62・63、国文学研究(梅光女学院
短期大学)2、清泉女子大学紀要14、人文論集(静岡大学人文
学部)17、愛知県立大学文学部論集17、文科報告(鹿児島大学
教養部)2、龍谷大学論集379～382、国語国文研究(北海道大学
国文学会)34・35、軍記と語り物4、国語学(国語学会)67・
68、東洋学術研究(東洋哲学研究所)5巻12・6巻3、人文研
究(神奈川大学人文学会)35、玉藻(フェリス学院大学)2
短大論叢(関東学院短期大学)30、鶴見女子大学紀要4、薩摩
路(鹿児島大学国文研究室)11、同志社国文学2、日本文学(東
京女子大学)28、中京大文学部紀要1、(五三頁につづく)

かはりに、幾分の健全性を得た」(276頁)と云う事を意味していると思われる。又、読本については、長編化し、雅俗折衷文体となったことを御指摘になっている。

後語について。「近代への接続」と副題がある様に、戯作が近代小説に如何に接続して行ったかを、戯作を中心に幕末文学界の様相を総括的に把え、明析な史観で分析される。

以上、内容の忠実な紹介専一と考え述べ来たったが、誠に要を得ぬ拙いものとなった。先生にお許しをお願いして、結びの言葉にはいらせて頂こう。

本書は、先きにも述べた様に、戯作についての御研究の成果によって、新たに、「戯作論」と題して、集約的に論述されたものである。従って、先生は「あとがき」で、主要十五の論文や、各章の終りに示される論文を参考にし、又読者自身が戯作を手にするのを、要望しておられる。この様に、本書を学術研究書としては、いわば「小柄」な形になされたについては、「『戯作の大論文』、『戯作の大著』、馬鹿馬鹿しい!」(「あとがき」)との御謙辞であるが、晴がましい事のお嫌いな御性格をよく示すものであろう。しかし、恐縮ではあるが、諸物価高騰の今日、学術研究書をかくも求め易くして、刊行された事を、若い研究を志す者として、誠に有難く思っている。

(昭和四十一年九月 角川書店刊 九五〇円)

▼受贈雑誌 昭和42年1月～6月(その二)

(四九頁よりつづく)ノートルダム清心女子大学紀要1、国文学漢文学論叢(東京教育大学文学部)12、名古屋大学文学部研究論集15、帝塚山短期大学紀要4、梅花女子大文学部紀要3、国語の研究(大分大学)2、熊本女子大学国語国文学論文集5、文学研究(九州大学文学部)64、中国古典研究(早稲田大学中国古典研究会)14、文学科論集(鹿児島大学文学部)2、山邊道(天理大学国文学研究室)13、論究日本文学(立命館大学)29・30、国文学攷(広島大学)42・43、日本文学ノート24、都大論究6、人文学報(東京都立大学)56、九州文化史研究所紀要12、東海大学紀要8、金沢大学法文学部論集14、帝塚山学院短期大学研究年報14、説林(愛知県立大学)15、名古屋大学教養部紀要11、山口女子短期大学研究報告21、園田学園女子大学論文集1、文学論集(佐賀大学)8、文学論藻(東洋大学)35・36、文学論集(関西大学)1・2、甲南女子大学研究紀要3、文芸と批評2巻3・4、徳島大学学芸紀要16、大阪府立大学紀要15、北九州大学文学部紀要1 試論(武蔵野文学会)12、国語国文学報(愛知教育大学)20、史淵(九州大学文学部)94、跡見学園国語科紀要15、明治大学教養論集37・39 明治大学人文科学研究所年報7、文芸研究所54・55、(毛頁につづく)